
絵画展にて

天崎 剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絵画展にて

【Nコード】

N2236C

【作者名】

天崎 剣

【あらすじ】

職場の先輩「遠田^{えんた}さん」の描いた絵を見るために、私は小さな絵画展へと足を踏み入れた。そこで出会ったのは、心を打つ、絵だった。自分の未熟さを噛み締める、私。心の成長を描く。

とある地方都市の、空き店舗だらけの商業ビルの三階。私は職場の先輩、遠田^{えんた}さんの紹介で、そこで開催される小さな絵画展へと足を向けた。高校のときに美術部だった私は、先輩の絵が拝見できると知り、わくわくしていた。

遠田さんは、五十代後半。課は違うが、温厚で、人当たりのよい人だ。四角い顔に、黒縁の眼鏡をかけ、もさもさした整わない白髪交じりの髪の毛が、あちこちに無造作に広がっている。芸術家というよりは、普通のおじさんである。

職場の人は口々に、「遠田さんの絵はプロだ。彼の母校にも三百号の油絵が飾ってある。数々の美術展に出品し、賞を貰っている」と言う。とにかく、素晴らしいらしいのだ。職場では、冴えないただの職員の一人に過ぎない彼が描く絵とは、いったいどんなだろうか。就職を理由に筆を置いてしまった私だが、そればかりが頭の中を駆け巡った。

バブルの頃に建てられたらしいそのビルは、殆ど廃墟状態だった。見た目もそうだが、中に入ってみると、更に酷い。一、二階の部分にテナント、三階部分が市民ギャラリーとなっている。テナントといっても、数えるほどしかなく、ただっ広い空間や、ビニルシートで囲われた部分が相当目立つ。若い女が一人で来るには少し勇気がいる。どちらかと言うと、用事がなければ来たくない所と言っても過言ではない。

エスカレーターを上がり、三階へ。市民ギャラリーの受付が目の前にある。

私は、そこで自分が更に場違いなのに気付く。

二十代の女性は私だけ。あとは揃って、四、五十代のおじさんお

ばさんばかりだったのだ。

受付で名前を書き、遠田さんを探す。知らないところで絵を見るのは初めてで、誰かにいて欲しかった。ギャラリーの奥で別のお客さんと話していた遠田さんが、私の存在に気付き、近づいて来た。

「いらつしゃい」

仕事場で聞く、そのままの声で私を迎えてくれたことに、ほっとする。

たくさん絵が飾られ、どこから見たらよいのか、全くわからない。困った私を見かねて、遠田さんは、一つずつ、解説してくれた。どういふ人が描いた絵で、どういふところがよいのか。わかりやすく、丁寧に。

水彩画、油絵。小さな空間に、美しい色たちが私を誘う。

仕事を始めてから、めっきり「絵」というものに疎くなってしまっていた。今日は久しぶりに、心が癒される。

「どんな絵が好きなの？」

遠田さんに聞かれ、私は即座に、

「風景画がいいです。あの人の絵は、細かく描写されていていいですね。色も鮮やかだし。あと、この女性の、幻想的な絵も好きです。透き通っていて、癒されます」

と答えた。なるほどと頷き、少し黙る遠田さん。私は何か、余計なことを言ってしまったんだろうか。

「私のはね、こういう絵なんだよ」

彼は私の目を見ると、にっこり笑って奥の絵を指差した。その先に、大きな木の絵が二枚ある。

私は、一目見ただけで圧倒されてしまった。

（う、うまい……）

正直、それ以外の感想が浮かばないくらい。

襖大の絵。巨木の根っこが、カンバスいっぱい描かれている。力強く、荘厳で、迷いのない色使い。

題材があまりに強烈で、私は足が竦んだ。

秋色に彩られたその巨木の正体は、川岸に落ちていた枯れ木なのだ、と彼は言った。

「私は、キレイな景色を描くほどの技術を持っていないからね。こういう、その辺に転がっている、素朴なものの方が、案外味が出るだろ？」

「はい……。そうですね。びっくりしました。こういう描き方もあるんですね」

「大きな木が転がっていたらね、私は喜んで車に積んで、家に持ち帰るんだ。そして、それを覗き込みながら、ああでもない、こうでもない、仕事が終わってから懸命に絵筆を取って、納得するまで色を塗りたくるんだ。そうすると、ただの木が、違う生き物に見えるてくる。自然が作り出した、美しさと言うものが、私にははつきりと感じ取られるんだ」

遠田さんの、絵を語る時の目は、きらきらと輝いていた。

仕事をしているときの遠田さんとは、全然違う人に見える。なんて、ステキなおじさんなんだろう。私は、職場の先輩としてではなく、人間としての遠田さんに、今まで以上の親近感を覚え始めていた。

「私が絵を描き始めたのは、実は、大分遅くてね。三十の頃にね、入院したことがきっかけだったんだよ」

「え……。そんなに、遅いんですか？」

自分の絵を一生懸命に見る私を気に入ったのか、彼は自分のことを語り始めた。

「そう、学生の頃なんて、絵筆を握ったことはなかった。事故を起こして足を骨折してしまってね、暫く入院していたことがあったんだよ。……その時にね、あんまり暇だったもんだから、絵を描き始めた。そしたら、コレが案外、おもしろくてね」

遠田さんは、高校卒業後、今の会社に就職し、それからずっと、仕事一筋だったらしい。でも、その入院のときのちょっとした出来事が、彼の人生を大きく変えていったようだ。

「誰に教わったわけじゃない、本当に、自己流だよ。だから、ここに一緒に飾ってあるほかの人の絵みたいは、上手には描けないんだ。技術がないからね。でも、思いの丈をぶつけるように、カンバスに向かうとね、とても気持ちが悪く落ち着く。そうやって、好きなことをやっているうちに、だんだん、自分の描きたいものが描けるようになってきたんだ……」

言葉の一つ一つが、心に響く。

カンバスに塗られた油絵の具の色は、私の知っているどの絵よりも重く、そして、暖かい。存在感を作り出す陰の暗い色、そして木肌を撫でる、明るい光。様々な色が、折り重なり、そこに、本物の木があるような、臨場感。思わず、息を呑む。

身体全体を使って描かれている。その筆の運び一つをとっても、力強く、滑らかだ。

彼の二枚の絵には、人柄とその生き方が、はっきりと浮き出ているのだ。

私はふと、自分が油絵を描いていたときのことを思い出した。

なかなか、思うように色が出せなかった。特に、影の色。

「一番明るい色の隣に、一番暗い色があるのだ」と、美術の先生は言った。

しかし、私は、その、「一番暗い色」を塗るのが怖かった。どうしても、思うように暗い色を出せずに、どの絵もピンボケしてしまっただ。せつかくの絵も、色の濃淡が出せないのでは、見ていてつまらない。わかっていながらも、高校生の私には、それが出来なかった。

遠田さんの絵を見て、私は、自分が何故あの時、暗い色が出せなかったのか、漸く答えが出た気がした。私には、確実に足りないものがあつたのだ。

経験。

絵を習ったことがない、と言う遠田さんに出せて、私に出せなかった、影の色。それは、人間として成長して、初めて出せる色ではないのか。幾ら私が、あの時頑張っても駄目だったのは、私に暗い色を出せるだけの経験が、足りなかったのではないのか。

遠田さんは他のお客さんに呼ばれ、私の隣からそつと、いなくなつた。

しかし私は、そこから暫く動くことが出来なかった。食い入るように、彼の紡ぎ出す色を見つめていた。

あれから、十年近く経つ。

久しぶりに、しまっていた油絵の道具を出してみた。

ツンと来る油とシンナーの臭いが、懐かしい。

キャンバスと、足りない絵の具を新調し、筆を取る。

遠田さんが絵を描き始めたという、三十歳になった私は、高校の頃より、成長しているのだろうか。あの頃出せなかった、暗い、影の色を、今は迷わず塗ることが出来るだろうか。

怖い、と言う思いは、まだある。

それでも、描いてみよう。

私がもし、あの頃より大人になっていれば、きっと、出来るはずなのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2236c/>

絵画展にて

2011年5月22日11時54分発行